米国姉妹都市派遣高校生 渡航レポート

町内在住の高校生２名が町姉妹都市協会から７月24日から８月７日までの２週間、米国ウィスコンシン州ラシン市に派遣されました。ホームステイや市民との交流など貴重な体験をされた高校生たちのレポートをご紹介します。

問　町姉妹都市協会事務局（総務課）　☎内線210

「コミュニケーションの素晴しさ」

淺井　淳之介

「You’re a member of my family」

ラシンに到着してしばらく、なかなか会話に入っていけなかった私に、ホストマザーのDawnがそう言ってくれました。その言葉が嬉しくて、自分から積極的に話しかけるようにしていきました。最初は思うように伝わらなくても、ホストファミリーは根気よく会話をしようとしてくれました。彼らはとても寛大で、感受性豊かな人達でした。

また、色々なところに連れて行ってもらえたことで、様々な文化に触れ、日本との違いを発見することができました。その中で一番心に残ったことは、コミュニケーションの取り方です。ラシンの人々は、皆知らない人同士であっても恥ずかしがることなく当たり前の様に会話をします。些細なことでも目を合わせて丁寧に詫び、道行く人と目が合うと笑顔で挨拶しあいます。彼らは日本人にはない親しみやすさを持っていて、とても感銘を受けました。日本人もこうであったら、もっと心を開くことができると思いました。

現地の人々の暮らしに触れ、心に触れることができ、貴重な体験になりました。このような機会を与えてくださったことに心から感謝いたします。これからもいろいろな形で貢献し、恩返しをしたいと思います。

▲左から２番目が淺井さん、３番目が髙部さん（ラシン市庁舎市長室にてラシン市長（右）、姉妹都市協会会長（左）に表敬訪問）

「皆違って皆いい」

髙部　優香

透き通る水のミシガン湖と街いっぱいの緑。そこから姿を見せる野うさぎや鳥。そんな大自然に囲まれた街、ラシン。気温も秋口のように涼しく、とても居心地の良いこの街で過ごした二週間。中でも、養護学校訪問は私にとって、新しい発見の連続で、深く印象に残っています。何故、養護学校を訪問しようと思ったか。それは、発達障がいのある弟がきっかけで高校で福祉を学んでいるからです。その中で、アメリカの福祉は、世界でも進んでいると知り、実際にどうなっているのか自分の目で確かめたいと思いました。

私は小学校を訪問しました。広大な敷地の中、校舎は一階建てで、バリアフリー、全てにおいてゆったりとした造りでした。壁には世界の人々や車椅子に乗る人が描かれていました。「君ならできる」「挑戦するまでわからない」などといった生徒のやる気を誘うメッセージが印象的でした。しかし、支援や設備が充実した中でも、障がいのため、思い通りに行動できない生徒もいました。そんな時、ほかの生徒が自然と手を差し伸べる姿が多く見られました。街に出れば不便なことが沢山あります。皆違って皆いい、助け合おう。福祉において、それがどんなに大切なことか改めて実感しました。

▲右から髙部さん、ホストシスターのオーブリーさん、淺井さん

町長が走る!! ㊲

国際姉妹都市との交流

本町は、アメリカ合衆国オハイオ州デイトン市とウィスコンシン州ラシン市と国際姉妹都市の盟約を締結しております。

今年は、デイトン市の高校生５名が本町を13年ぶりに、また本町の高校生２名がラシン市にホームステイしました。両学生たちが自らの文化との相異などを、生活体験を通して学ぶ機会が多くあったことと思います。これらの経験を活かし、ご自分の未来を築き上げていただきたいと思います。

今後も関係団体等のご協力のもと、国際姉妹都市との友好交流を深めていくことにより、国際的な視野をもった日本の子どもたちが増えていくよう大きく期待しております。

大磯町長　中﨑　久雄

▲迎賓館でのレセプションの様子